

学会ニュース

日本女性学会

第10号 1982年4月

第 3 回 総 会 等 の 御 案 内

伸びゆくものの快い刺激に充ちた若葉のこの季節、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

さて、例年のごとく、この6月、日本女性学会の第3回総会を開催することになりました。ここに総会の御案内状に替え、ニュースレターをお送り申し上げます。詳細は別記の通りでございます。

過去2回の総会は、いずれも東京において開催されましたが、このたびは神戸女学院大学の格別なおはからいによって、初の関西での総会開催を実現することができました。同大学の関係者の方々に深く感謝申し上げますとともに、初の関西総会を成功させるよう、会員の皆様の御協力をお願い申し上げます。同封いたしました葉書により、御出欠をお知らせくださいませ（御欠席の場合は委任状をいただけますようお願い致します）。

今回の総会におきまして、現役員（幹事ならびに会計監査役）の任期が満了いたしますので、新たに役員を選出していただくこととなります。会員の資格として年齢、学歴、社会的立場などを問わない日本女性学会としては、会活動を実際に積極的に推し進めてくださる意志のある方々こそ、役員となるにふさわしい方々であると思われまふ。そのようなお志のある方々からのお申し出を、切望してやみません。

総会に引き続き、午後からは会員の水田宗子さんに講演をお願いしております。文学と女性学との関わりを深く掘り下げていただく予定です。フロアとのディスカッションに大きな期待を寄せておりますので、口火を切る役目をお願いした駒尺喜美さん、藤枝滯子さん以外の方々からも、活発な御発言がいただけますようお願いしております。なお、公開の講演会と致しますので、会員以外の方々をもお誘いいただければ幸いです。

これらのプログラム終了後、今回は懇親会を計画しております。日頃接触を持つことのむずかしい遠隔地や異分野の方々と、膝をまじえて楽しい一時を過ごしたいと思ひます。なお、本会員でない関西の女性学関係者の御出席もお願いして、交流の実を一層高めたいと考えております。

最後になりましたが、当日は受付で82年度の会費を申し受けますので、どうぞ御用意ください。また総会に御欠席の方々、一部会費の滞納のあるの方々、会費納入について御協力をお願い致します。

記

日 時 1982年6月19日(土)
午前11時～12時30分 総会
午後1時30分～5時 公開プログラム(講演ならびに討論)
場 所 神戸女学院大学(道順は地図参照)

総会議事

経過報告/会計報告ならびに会計監査報告/82年度の活動方針ならびに予算/役員改選

公開プログラム

講 演 水田 宗子 女が自分を語る時 — 宮本百合子とポーボワールの自伝小説を中心に

討論の口火役

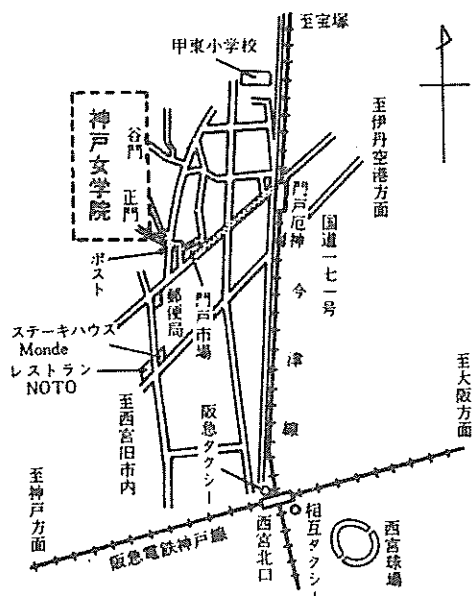
駒尺 喜美(法政大学) 藤枝 滢子(京都精華大学)

司 会 北沢 杏子(評論家)

会 費 会員以外の方は500円

懇親会の御案内

当日のプログラムを終了した後、午後6時～9時、夕食を共にしながらの懇親会を計画しています。会費は3千円～4千円の予定。参加を御希望の方は、同封はがきにて事務局まで御連絡下さい。なお、会場の予約等の都合により、申し込み/切りを5月10日までとさせていただきます。



＜ 神戸女学院大学への順路 ＞

阪急電鉄「大阪梅田」から神戸方面行き特急に乗り、「西宮北口」にて今津線宝塚行きに乗り換える。「神戸厄神」(もんどやくじん)下車、徒歩15分。「西宮北口」からタクシーの便もある(約5分)。「大阪梅田」から「西宮北口」までの特急所要時間は15分。なお、新幹線で新大阪下車の場合、国電にて大阪駅へ出る(新大阪の改札で乗車券を渡してしまわないように)。

水田宗子（みずた・のりこ）さん紹介

1960年東京女子大学英米文学部卒業。東京都立大学修士課程を経てイェール大学に留学。1970年博士号取得。独協大学、スクリプス大学（米カリフォルニア）で教鞭をとった後、現在、南カリフォルニア大学比較文学準教授。70年代初頭からカリフォルニアを中心に起った女性学研究に参加、以来大学で女性学講座を続けて担当しておられます。近代文学批評において、欠落視点であった女性の自我を視座の中心に据えて、批評および批評理論を考えなおすことを今までの中心課題として来られましたが、最近では自伝論の他に現代詩における告白についても書いていらっしゃるとか。日本女性学会の設立発起人の一人です。

著書 — Reality and Fiction in Modern Japanese Literature, M.E. Sharpe, Macmillan, 1980. 『鏡の中の錯乱 — シルヴィア・プラスの詩』（プラス論およびプラスの詩選）静地社、1981年。『エドガー・アラン・ポオの世界』南雲堂、1982年。ほかに詩集として、『春の終わりに』八坂書房、1977年。同『幕間』八坂書房、1980年。女性学については論文「アメリカにおける女性学の拾頭」（富士谷あつ子編『女性学入門』サイマル出版会、1980年、所収）、論文「女性学は存在し得るか」（『思想の科学』1981年7月号、所収）。

今回の講演では、文学の発生以来、女性が自分を語ることの歴史をたどりつつ、従来文学の主流ではなかった自伝小説をとりあげ、フェミニズムとの結びつきを論じたいと言っておられます。とり扱う作品としては、宮本百合子の『伸子』『二つの庭』『道標』、ポーボワールの自伝、アナイス・ニン『アナイス・ニンの日記』、リアン・ヘルマン『未完の女』ほか、河野多恵子、富岡多恵子の最近の作品まで。

シンポジウム「女性学への期待」

に 参 加 し て

漆 田 和 代

1981年10月24日、国立婦人教育会館において、「女性学への期待」と題するシンポジウムが開かれた。国立婦人教育会館が、前年に引続き行った2回目の女性学講座の一環として企画されたもので、受講者は女性学に関心のある成人男女、2回にわたる宿泊参加が可能という条件で申し込んだ20代から60代までの方々。やはり30代の参加が目立ち、東京、埼玉を中心に全国から集まって、男性の姿もちらほらと言ったところ。職業を持つ人が34%で、主婦の30%をしっていた。休暇をとって来ている人、出張で派遣された人であろうか。どの人も何かをつかんで帰りたいと、真剣そのものの表情だった。

このシンポジウムには、国立婦人教育会館が日本の主な女性学研究・実践グループであると見なした4団体から、各1名の代表が講師として招かれていた。国際女性学会からは原ひろ子さん（お茶の水女子大学）、女性学研究会からは平野貴子さん（武蔵野女子大学）、日本女性学会からは私、日本

女性学研究会からは樋口佐代子さん（大阪読売広告社）が出席した。はじめに、それぞれのグループの会の目的および研究・活動について説明し、一巡の後、会としての今後の研究計画を述べるというのが、およその段取りであった。

よくマスコミ関係者から、女性学と名のつく団体は数が多いし名前も似ていて閉口だ、という声を聞かされる。このニュースを目にする会員の皆様も似たような感想をお持ちかもしれない。だから、会の名称よりも、〇〇さんたちの会という言い方が通用するのも、あながち不思議ではないのだろう。私個人としては、他の3団体のメンバーとも一緒に研究会を持ったり、親交もあって、実情はほぼ理解していたつもりだ。が、ひるがえって、日本女性学会のことは、これまで肝心な点がかかり誤解されていたことがわかり、会館がこのようなシンポジウムを企画したことの意義を痛感させられた次第だ。

まず国際女性学会は1978年7月の発足。現在の代表幹事岩男寿美子さん（慶応大学）がアメリカに滞在し、広中和歌子さんらハーバード大学周辺にいた人たちと、日本の主婦についての国際シンポジウムを開くことを話し合っ、研究会を始めたのがきっかけ。このシンポジウムは78年7月国立婦人教育会館で行なわれ、女性学という言葉を一一般の人に知らせるきっかけを作ったのは御承知の通り。現在の会員は30数名、40名以下にとどめたいという。プロジェクトごとの分科会を月2回、月例の全体会を月1回と、スケジュールはかなり密。同じ関心で話し合い、実際の研究作業ができることを大切に、心理学、社会心理学、社会学、文化人類学、思想史などを中心に集い、文学、女性史は欠く。目下取り組んでいるのは「中小企業的女性経営者」「働く母をもつ子の研究」など。ハーバードに支局があるが、本部とは独立会計で、独立の口座を持ち、自由に活動しているという。原さん個人は女性学を「女性のための女性による女性の研究」とは考えず、従来人間理解に欠けていた男女両方の視点から見ることだと理解しているというが、女性学ならびに性差別をなくすための実践活動について、メンバーの考え方は千差万別だという。

女性学研究会は1978年3月の発足。神田道子、目黒依子、袖井孝子さんら社会科学系の専門分野に携わる人を中心とした会で、自身研究成果を提供可能な人たちに限定。毎月の定例研究会では未公開ないし発表前の研究を披露。「日本における女性大学教員の全国分布」「明治国家と母性の問題」「女性アルコール依存者の諸問題」等々。地味で着実な成果を期待してきたが、80年6月と11月に上智大学で公開シンポジウムを行ない、その記録を『女性学をつくる』（勁草書房）としてまとめた。会の基本姿勢として女性学を、今日女性が抑圧された性として在るという基本的視点に立つ学問であると見なし、テーマも性差別の問題を中心に設定、研究と運動・実践の相互関係の重要性を強く認識しているという。会員拡大よりは、女性学の研究会同士の相互交流を進めたいと考えており、『講座・女性学』（全4巻）を準備中という。

日本女性学会について、私は次のようなことをお話ししたい。79年6月の発起人による趣意書の発表から80年6月の第1回総会（正式発足）までの経過、規約や会活動の概要。会の特色としては、会員数百数十名で全国的規模、人文・社会科学から自然科学まで専攻の多様性・学際的可能性——したがって、何かの共同研究をするための機能的集団というより、むしろ、女性学インタナショナルでの基調的な見解（ニュース4号参照）のように、女性学をあらゆるレベルで行なわれるべき研究・教育運動という側面からとらえて、アカデミズムの内外を問わない研究や情報交換の場でありたいと考えていること。そして、ニュースの「私の仕事・研究」にある会員の声を引いて、日常性の中から女

性学のテーマを見出すことの具体例、その重要性についてもお話した。

現在は規約を承認し会費を払う人なら入会資格は問わない、と述べたとき、会場の一部に驚きの声が上がった。正式発足までは原稿用紙数枚で研究概要を記すよう求めていたから、それを論文審査と誤解した向きがあるとは承知していたが、その誤解がいまだに引継がれていたようだ。会終了後出席講師の中からも知らなかったと告げられ、考えさせられた。また、事前に幹事会で打合せた通り、女性学関係の諸団体の提携・統合は望むところである、しかし内部事情もあろうから現状では人的相互交流（オーバーラップして入会するなど。現状でもかなり行なわれていることを説明）を歓迎するし、団体間の共同の仕事（本の出版とかシンポジウムとか）も実現したいと述べておいた。

日本女性学研究会は1977年京都で発足。会員資格を特に問わず、現在では年齢、職業も様々な会員が120名足らず、全国に及んでいるという。が、研究面を担う分科会・プロジェクトチームの活動は主に関西地区で行なわれている。「比較女性学分科会」「教育者会議分科会」「キブツ研究分科会」「女性と文学読書会分科会」「女性の就業促進プロジェクトチーム」等々があり、このシンポジウムには「他の女性グループとのジョイント企画プロジェクトチーム」の窓口を任める樋口さんが出席した次第。講座やシンポジウム、例会は有料で一般に公開され、講師は分科会のメンバーや外部からの招待者が任める。他に先駆けて80年から『女性学年報』を創刊。富士谷あつ子さん（当日オブザーバーとして出席）が主唱されていた「生涯教育」の一環としての女性の教養講座的な色彩もとどめつつ、研究活動や現実の女性問題解決のための行動に積極的に取り組み始めている様子がわかった。

その後、質疑と女性学の学習のすすめ方について、熱っぽい討議がなされたが、紙数の制約もあり、ここでは割愛する。女性学関係の研究グループは、この他にも国際女性研究会（井出祥子さんら）や、お茶の水女子大学女性文化資料館研究会、フェミニストセラピー研究会（河野貴代美さんら）ほか、各地の女性史研究グループまで多々あることを申し添えておきたい。

＜ 第 8 回 研究 報告 会 報 告 要 旨 ＞

70年代のウーマンリブ運動

江 原 由 美 子

1970年秋、東京で『おんな解放連続シンポジウム』『解放のための討論会—性差別への告発』等の集会が相次いで開催された。それらの集会に結集した熱意とエネルギーは、現代日本社会の性差別構造を激しく糾弾し、女性解放の必要を高らかにうたいあげたのである。日本におけるウーマンリブ運動の始まりであった。運動は全国各地の無数のグループをまきこみながら、やがて「優生保護法改悪阻止闘争」に向かっていく。この70年代のウーマンリブ運動が、国際婦人年を経て現在の女性解放運動につらなる直接の源泉であることは言うまでもなからう。

しかしこの初期ウーマンリブ運動に対する理解は決して充分であるとは言いがたい。世間的な評価においては、いまだに『一部の特殊な女のバカサワギ』以上のものではない上に、若い新しい世代の女性達にすらその真の姿がコミュニケートできていないか疑わしい状況にある。それは一部には、当時のマスコミによる徹底的な嘲笑が原因であろうが、他面リブ運動の掲げた主張のわかりにくさも一因になっているのではないか。本報告は以上の問題意識に基づき、初期リブ運動の運動基盤・組織特

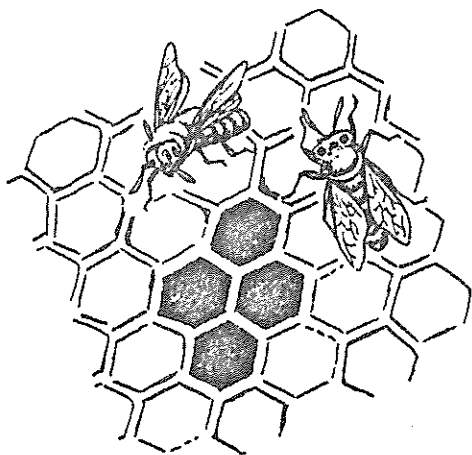
徴等を考察しつつその主張点の理解を目的とした。この場合資料の制約等から考察の対象を「ぐるうぶ闘うおんな」を中心とした東京の運動体に限定した。

70年代リブ運動の社会的背景としては、核家族化の進行・地域的社会的移動の増大・住宅事情の悪化・コミュニティの崩壊等60年代に進行した現代都市問題が挙げられよう。こうした背景により主婦の生活様式が根本的に変化してしまったにもかかわらず、伝統的な性別役割分業観は女は家庭という昔ながらの考え方を維持しつつ、職業分野における性差別は厳然として存在した。ここから女と子供が家庭に押し込められ社会から切り離されていることに対する不満と矛盾が一般に生じていた。60年代後半の新左翼運動は数多くの若い女性を運動に参加させ、運動の中でも存在する性差別により問題意識を先鋭化した運動経験のある女性を層として形成していた。ここにどんなきっかけによっても運動が生じる基盤が生じていたといえよう。

リブ運動の運動としての特徴を挙げればそれは、(1)自主的に形成された小人数グループを基盤としそれらグループ間のゆるやかな連合として運動体を形成したこと、(2)個人的体験の政治化という主張、(3)意識変革・文化変革の重視、(4)性の問題への真正面からの取り組み、等として把握される。これらの特徴はそれ以前の運動とリブ運動とをはっきり区別している。

リブ運動の主張したことは様々な領域にわたっており、非常に豊かな内容を持つが、本報告で強調した点を挙げれば、それは基本的に女性のアイデンティティを巡る問題だったということである。彼女等の主張はマスコミ等で創り上げられたイメージとは全く異なり、非常に内省的・内面的な傾向を持っていた。既存の女性のプラスイメージ——「母」や「主婦」や「労働者」——に立脚して、その上で「女性の主張」をするのではなく、これらの既存の役割観が女性を束縛し、本当の生き方を困難にしていると批判したのである。その批判はしばしば、「理解されることの拒否」を生み、世間から「ヒステリック」「感情的」といったレッテルを貼られることになった。だがその安易な理解を拒否する姿勢が、リブ運動の問題提起の深さを物語っているといえるのではないか。

討議においては、アメリカのリブ運動との比較、75年以降の運動、特に「行動を起こす会」との関連等が問題になった。また中ピ連の評価をめぐる問題、地方の運動の重要性等に関しての御批判をいただいた。リブ運動と芸術におけるダダ運動との共通性・関連性という非常に啓発的な提起もいただいた。我々の同時代史である故に様々な見解・立場の相異がそれだけ問題になることも多かったが、リブを経た現在の我々の生き方・運動のあり方・女性学の方向等をめぐって実り多い討議が行えたと思う。



昭和56年度寄贈図書

(1982年4月5日現在)

- 青木やよひ『子供をゆがめるものは何か』灯台ブックス60 第三文明社、1981年。
- 北沢 杏子・男女交際『男子の性心理』、『女子の性心理』(スライド)、アーニ出版、1981年。
- 松原 純子『現実・未来 女の視点—欧米との比較も—』古河国際教養センター・第55回国際教養公開講座講演録別刷、古河国際教養センター、1981年。
- 田中由布子『女性被支配者階級の経済学』女性経済研究会、五月社、1981年。
- 女性学研究会編『女性学をつくる』勁草書房、1981年。
- 北沢 杏子『実践レポート ひらかれた性教育1—3歳から9歳まで』アーニ出版、1981年。
- 駒尺 喜美『結婚の向こう側—その愛にふみ切っていいか』主婦と生活社、1981年。
- ハワード・W・ハッカー『古代医術と分娩考』巴陵宣祐訳、エンタープライズ社、復刻版(1931年初版)、1982年。
- 星野 澄子「戸籍・国籍法と性差別」(雑誌『現代の目』現代評論社、1981年10月号)、1981年。
- 亀山美知子「日本近代看護史における看護婦の社会的地位・評価に関する研究(10)」(雑誌『看護』第33巻2号、1981年1月)~「同(22)」(雑誌『看護』第34巻2号、1982年2月)。
- 国立婦人教育会館・雑誌『婦人教育情報』、第一法規出版、№2—1980.7 婦人教育が目指すもの・「国連婦人の十年」の中間年に、№3—1981.3 婦人の再教育、№4—1981.10 家庭教育の課題
- 東京都婦人情報センター・雑誌『婦人情報センターだより』、東京都都民生活局婦人青少年部婦人計画課、№1~№8。
- 児玉 勝子編・雑誌『月刊婦人展望』、婦人会館出版部、'81.9~'82.3。
- 労働省婦人少年局『日本婦人問題会議会議録』第1回・男女平等と婦人の社会参加—30年の歩みをふまえて(昭和51年11月5日)、第2回・男女平等と社会慣習(52年11月2日)、第3回・男女平等と社会慣習—婦人の活動分野をひろげるために(53年11月2日)、第4回・男女平等と社会参加—婦人の活動を進めて(54年11月2日)、第5回・男女平等と社会参加—活動を発展させる(55年5月30日)
- 後藤 祥子『大学婦人協会々報J.A.U.W』123号~125号、大学婦人協会、1981~1982.3.1。
- 女性学研究会『Voice of Women』№5~№25('82.2.13)
- サンパティック編集部『サンパティック』1号~3号(1982.1月号)

会員の著作

最近発行された会員の方々の出版物を御紹介し 年刊、1500円 ※
ます。なお、ほかにも会員の方々で書物を出版さ 〇駒尺喜美『結婚の向こう側—その愛にふみ
れた方、される方、事務局に御一報くだされば御 切っていいか』主婦と生活社、1981年刊、
紹介させていただきます。雑誌や紀要に載せられ 880円 ※
た論文等についても、御連絡のありました方は、 〇水田宗子(訳著)『鏡の中の錯乱—シルヴィ
同じ扱いと致します。なお、※印は御寄贈いただ ア・プラスの詩』静地社、1981年、3000円
いたものです。紙上より厚く御礼申し上げます。 〇白井厚・白井堯子『女性解放論集—付・女
性史の文献』慶応通信社、1982年、2200円 ※

〇北沢杏子『実践レポート ひらかれた性教育
1—3歳から9歳まで』アーニ出版、1981

事務局から

- 会員数は1982年4月5日現在で128名です。5月中に新しい名簿を作成し、6月の総会にて会員の皆様にお渡しする予定です。
- ただ今幹事会にて、82年度の研究報告会(9月、12月、3月)を計画中です。会員の方で研究報告が可能な方は、同封のはがきにてお申し出下さい。また、今年度中に出産をテーマにした研究報告会を開く予定です。
- 今度の総会で、幹事・役員改選が行われます。幹事は地域・分野を考慮して総会の席上選出されますが、学会の運営に積極的に関われる方を求めています。会員の方で意欲のある方はぜひお申し出下さい。
- かねてより懸案となっておりました年報を、今年こそは作成しようという声が上がっていますが、なかなかメンバーが集りません。会員の皆様から広く年報作成に参加していただける方を募りたいと思いますので、ぜひ事務局までお申し出下さい。
- 昨年10月より読売テレビ放送ならびにテレビ東京で放映されているアニメ「まいっちゃんぐマチコ先生」(女教師をセックスシンボルとして描いたもの)の放映中止を求めて、関西の女たちが行動を起し、「まいっちゃんぐマチコ先生」に抗議する会が発足しました。性差別的なマスメディアに対する抗議行動への協力と呼びかけが届いています
京都市左京区浄

○ “日本とアジアの女性問題と女性学”を総合的に扱った「Feminist」(国際号・英文・1200円)の残部があります。資料としてほしい方は、渥美育子さん

まで郵送料200円を添えてお申し込み下さい。

編集後記

- 今号よりはじめて編集のお手伝いをしました。不器用なので仕上がりが心配です。お気付きの点等ありましたら、御遠慮なくお申し付け下さい。(大賀 美弥子)
- ひょんなことから居酒屋の専業ママになって2カ月余、渋谷は道玄坂に仮住居をする身。時折のぞいてくださる会員の方々のお励ましに感謝しながら、任期までは責めを果たしたいと念じている。今号の編集は大賀さんにずいぶんオンブした。最後に一つだけ公私混同をお許しあれ。店の名はじょあん。

(漆田 和代)

発行 日本女性学会
〒103 東京都中央区八重洲 1-4-21
共同ビル 13F 西洋美術研究会内
電話 03-274-1791
